
School Wars

グラさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S c h o o l
W a r s

【Nコード】

N 9 1 3 4 X

【作者名】

グラさん

【あらすじ】

科学が進歩し、国民の生活がさらに良くなったと思われた未来。だがそれは間違いだった。政治の乱れは収まりを知らず国民の反感もとうとう犯罪に発展し始めた。特に子供を使った誘拐事件が…

政府はその自体収集に、科学を駆使したあるシステムを学校に導入

し、犯罪の沈静化を図った

これは、そのシステムが導入されてから20年後の物語である

初めに…

ここはある学校の寮のある部屋の女子生徒と男子生徒の会話である。夜、女子生徒のほうは荷物をまとめていた。男子生徒はそれを布団に座りながら謎めいた顔をして見ている

「先輩、なんで荷物まとめてるんですか？」

男子が言葉を切り出す

「今日、アナウンスで呼ばれてたでしょ

その時部屋移動を言い渡されたの」

荷物を用意しながら女子が話す

「また急ですね」

「そうね。先生が言うには転校生が来る都合でのことだそうよ」

「転校生？」

「聞いてないの!？」

一年生に転校生が二人来るって…」

女子は男子の返答に少し驚いた声で答える

「基本、学校は寝てるので」

「はあ…」

君って入学当時から変わらないわよね…」

「すみません…」

「とりあえず、明日部屋同士の対抗戦が関係してると思うわ

一年生だし多分男子だとでしょ」

男子は安息をそつと漏らす

「もしかして私と殺りたくなかったの？」

「そんなことないですよ！」

いざとなれば先輩なんて一捻りでやってあげますよ！」

「ふーん♪」

そう。じゃー私は荷物も纏まったし出てくわね。

転校生との対決、楽しみにしてるわ」

「ありがとうございます：」

嬉しく無さそうに男子生徒は答える。その言葉と同時に女子生徒は部屋を後にした。

プロローグ（1／2）

「はああ〜」

大きなあくびをして、朝から同じ学校の生徒に紛れ登校する一人の男子がいた。つか俺、紀早稀^{キサキ} 朱也^{シュウヤ}である。

今日は特別クラス選別試験という、変わった名前の試験がある。ちなみにこれは実技試験のみか筆記試験と実技試験の両方をするか選択できる。

何で筆記試験のみがないのと聞きたいやつもいるかも知れないが、理由は後々わかると思う

まあ俺は実技試験自信ないから、筆記試験と両方にした

「よう、朱也！！」

朝から元気良く声をかけてきたのは古田^{コダ} 亮^{リョウ}。中学からの俺の親友だ。

「よう、古田…」

「なんだ朱也、元気なさそだな。もしかして試験やばいのか！」

「まあな…」

それを言うなら古田も実技試験のみで大丈夫なのか。確か相手、学年トップじゃなかったっけ？」

「大丈夫大丈夫！」

こっちには秘策があるんだよ！！
だから絶対負けないんだよ」

「そうか、負けないのか。
なら、俺と闘ってみないか」

「当たり前…。」

わっ！夢さん！！」

後ろから声をかけてきたのは姫城^{ヒメジョウ} 夢^{ユメ}。女なのに男のようなしゃべり方をする。風紀委員委員長を勤めている。かなり好戦的。

「下の名前で呼ぶなフルタ」

「あの僕コダなんですけど…。」

「こだは言いにくいからふるたでいい」

「なんだよ、夢が普通に登校するなんて珍しいな」

「なんだ、シュウ！

俺が試験の日くらい普通に登校しないと思ったか！！」

「まあお前バカだからな！

日も間違えると思ってた…」

「学校に着いた瞬間、八つ裂きにしてやろうか！」
握りこぶしを朱也に見せつけ、声を荒立てる

「1＋1は？」

「えっ！？」

急に夢が顔をしかめた。

「えっと・・・11」

「やっぱりバカだ」

ズゴッ！！！！

それとなく鈍い大きな音がまわりに響き渡る。何の音か・・・

「まったく！

急に言われたら答えられないだろうが！！」

「おい。大丈夫か？朱也？」

俺が地面にたたきつけられめり込んだ音だ。

夢はそのまま早歩きで先に行ってしまった。まあ、ものの見事にある簡単な答えを間違えたのだからそんなことを聞かれては誰もが離れたくなるだろう。ただ、夢の場合は度が過ぎるのだが。

それよりも、俺次からの話に出てこれるのか？

プロローグ(2/2)

夢に殴られてから俺が目覚めたのは保健室のベットの上だった。

「うう……。ここはどこだ？」

「おはようございます、紀早稀君。^{キサキ}体調は大丈夫ですか？」

今声をかけてきたのは、神野先生。^{ジンノ}保険の先生であり、誰からも慕われるやさしい先生。

「おはようございます、神野先生。体調は大丈夫なのですが、なんで俺ここで寝てるんですか？」

「朝、古田君^{こた}が引きずって気絶したあなたを運んできたんですよ。気絶した理由は……。『隕石が降ってきて紀早稀君の頭にぶつかった』とかだったかしら。いや、『ダンプカーにはねられた』だったかしら」

(先生……普通なら俺死んでます)

そんなことを思いながら俺は先生の話聞いていた。

だが、脳はそんな呑気な話を聞いていながらも活性化を続ける。

「先生、今何時ですか!？」

先生の考えているところに俺は割って入って聞く

「えっと……。今は11時ね」

先生は腕時計を見て言う。その言葉をきいた瞬間、俺はまさに隕石

に激突した時のような衝撃が頭の中に駆け巡った。

「そうですか。ありがとうございます。」

（まじかよ…。筆記試験終わりがけの時間じゃねーか!!）

「まだ、安心できないからもう少しゆっくりしていきなさい」

「いや、大丈夫です。もうぴんぴんしてるので！」

先生に話しながら俺は横にあった制服をとり着替える。その勢いで俺は荷物を取り保健室が出る。

（しかし、頭クラクラするな。そんな考えてる場合じゃない!!、急がないと確か試験会場は三階だったな）

急いで階段を走って試験教室に向かう。

だが、今日の俺はついてないらしい……。

（ヤバイ…めまいが…）

急いで昇る最中めまいにより、二階中腹到達寸前で段差に足をとられ背中から落下した。

立て直そうとするが間に合わない。

（このまんまだと頭から落ちて、死ぬ!!）

でもたて直せない…、ダメか!!…）

「うわぁー!!」

俺は目を閉じた。死ぬかと思っていた。だが、これは、神様の出会いという俺に対するイタズラだった。

「あんた大丈夫？」

俺はいつの間にか二階中腹にいた。一人の女性に抱えられながら。

第一話『優秀転校生vs未熟主人公』

「あんた大丈夫？」

俺は、その言葉で目を開けた。

彼女はそれを確認したのか、俺を床に下ろす。

「俺…、助かったのか。」

ボソツと俺はつぶやく。

「近くに私がいてよかったわね。あんたが落ちそうなところが見えたから…ぎりぎりだったけど間にあったわ。」

（上級生の人かな。それにしても、俺よりひとまわりかくらい小さいな。）

「ありがとうございます。今、ちょっと急いでのので今度にでも何かお礼します。」

俺は再び三階に昇り始めようとする

「あっ！

ちよつと聞きたいことがあるんだけど。」

「なんですか？」

「保健室ってどこ？」

「保健室なら一階のこの下から靴箱はさんだ向こう側をすぐに右に曲がればつきあたりにありますよ」

「ありがとっ！」

彼女は降りて行った。

（気分でも悪いのかな。にしては、俺をあの体で持てるわけないか。
あの人とはぶん実技試験のみなんだろうな）

俺は再び走り出し教室に向かう。教室に入るとすぐに俺は試験にとりかかった。

だが、もちろん時間は足りるわけもなく、しかも気絶していたせいか大体の部分を忘れている。俺は絶望感にさいなまれながら、試験時間を頭を抱えながら過ごした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9134x/>

School Wars

2011年11月7日13時09分発行